

どいふがごとし、

〔伊勢參宮名所圖會〕^三津 七十二町と云、工商軒をならべ、繁花富饒の地也、こゝを津と云は、古船著海濱の湊にてありし故なり、舊名安濃の津といふを、いつとなく津とのみいひならひたるなるべし、

〔日本書紀通證〕^一三津

伊勢風土記曰、安濃津、仁德三年乙亥、定三津、其一也、夷方之蠻船、本邦公私之著船、湊入之船、各來于此、待其風雲、舉國之名湊也、

〔平家物語〕^一すゞきの事

抑平家、かやうにはんぢやうせられける事は、ひとへにくまのごんげんの御利生とぞ聞えし、其故は清盛いまだあきの守たりし時、いせの國あのみより、舟にてくまのへ參られけるに、大きなすゞきの舟へおどり入たりければ、せん達申けるは、昔まのぶわうの舟にこそ、白魚はおどり入たるなれ、いかさまにも、是は權現の御利生と覺え候、まいるべしと申ければ、さしも十かいをたもつて、まやうぢんけつさいの道なれども、自てうびして、我身くひ家の子郎等共にもくはせらる、

〔一代要記〕^{後字多}弘安二年十月口日、熊野神輿一基、依訴訟有入洛之企、依寄伊勢國阿野津、

〔太平記〕^{二十}奥州下向勢逢難風事

九月十二日ノ宵ヨリ、風ヤミ雲收テ、海上殊ニ静リタリケレバ、舟人纜ヲトイテ、萬里ノ雲ニ帆ヲ飛ス、兵船五百餘艘、宮村^{○後}上御座船ヲ中ニ立テ、遠江ノ天龍ナダヲ過ケル時ニ、海風俄ニ吹アレテ、逆浪忽ニ天ヲ卷翻ス、或ハ橋ヲ吹折ラレテ、彌帆ニテ馳ル船モアリ、或ハ梶ヲカキ折テ、廻流ニ漂船モアリ、^{○中}略